

# The Self-Construal Scale: A Potential Tool for Predicting Subjective Well-Being of Individuals With Autism Spectrum Disorder

牧之段, 祥恵

---

<https://hdl.handle.net/2324/4474978>

---

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士  
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



KYUSHU UNIVERSITY

氏名：牧之段 祥恵

論文名：The Self-Construal Scale: A Potential Tool for Predicting Subjective Well-Being of Individuals With Autism Spectrum Disorder

(文化的自己観尺度は自閉スペクトラム症者の主観的幸福度を予測するツールになりうる)

区分分：甲

### 論文内容の要旨

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; ASD) は「社会的コミュニケーションおよび社会相互作用の持続的な欠陥」と「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」の2つの中核症状に加えて多様な周辺症状を呈し、またその生物学的背景も様々であるため、その病態は十分に解明されておらず、治療的介入法も未確立であることが社会的問題となっている。ASD の症状形成に文化的背景が寄与していることのエビデンスは蓄積されつつあるが、文化的自己観に着目した研究はこれまでになかった。そこで我々は31名の高機能ASD患者と60名の定型発達者の文化的自己観の比較検討を行った。加えて、高機能ASD患者の文化的自己観について、IQ、逆境的小児期体験、注意欠如・多動症症状、ASD症状及び主観的幸福感との相関から検討した。その結果、高機能ASD患者は定型発達者と比較すると、より相互独立的な自己観をもっていたが、予想に反して多くのASD患者(43.8%)が相互協調的な自己観を呈した。また、高機能ASD患者の文化的自己観は、就学前のASD症状、自律性の欲求充足及び関係性の欲求不満と非常に強い相関を認め、彼らの主観的幸福感の予測につながることがわかった。本研究から、文化的自己観尺度を用いた高機能ASD患者における文化的背景の検討が、ASDの多様な表現型を理解し、患者の特性に応じた適切かつ効果的な治療的介入を選択するために有用であることが示唆された。